

# 『破戒』の基軸——丑松の告白の本質

はじめに

『破戒』は、鳥崎藤村が詩人から小説家へと転換するなかで、『緑葉集』に収録された主な短編小説<sup>①</sup>を経て、人間平等、自己肯定などの近代思想を知った明治の新時代を生きた青年の「眼醒たものの悲しみ」を核とし、精力を傾けて完成させた長編小説である。

この作品は、封建的な因習が根強く残る信州の小さな町・飯山を舞台に部落民出身である若い教師・瀬川丑松の苦悩と精神的な解放の獲得を基軸にしながら、明治社会に生きる弱者の苛酷な現実にもスポットをあて、封建的な身分差別に苦悩する丑松の恐怖と葛藤、これを取りまく社会底辺に生きる人々の悲哀を映し出している。

これまで『破戒』は、部落問題を題材にし、丑松の苦悶の原因は封建的な身分制度に基づく差別社会に問題があるとする、いわゆる社会小説である、もう一つは、秘められ

た作者自身の自我内面の苦悩を仮託したところに主眼をおいた、いわゆる告白小説であると多角的な視点から論じられてきたが、本論は、これらを踏まえて、丑松の告白に着目し、その内包する問題と本質に迫る『破戒』論を展開していくことにする。

## 一 時代の荒波に翻弄される部落民

明治四年（一八七二）三月、明治政府により「斃牛馬処分自由令」が出された。これまで、幕府の公認のもとに、部落民は下級警察役務、斃牛馬や皮革関係などの職業にあたることが特権とされていた。この職業は忌避・賤視されてはいたが、明治期以降の近代化（資本主義化）の急速な発展と肉食の普及に伴って、牛馬の商品価値が注目され、経済利益を得るために病牛馬が売買される非法な取引までが行われるようになった。そのような背景のもとに、斃牛馬の処分を「持ち主の随意」にさせたらどうかという農民

倉持 リツコ

や町人（一般民側）からの「伺い」に応じて、明治政府は「牛馬はもちろん、獸類たりとも、すべて持ち主の者、勝手に処置」するという「処分自由令」を發布したのである。その結果、何の生活保障も行わないままに、部落民の既得権益が取り上げられた。そればかりか、明治五年（一八七二）につくられた「壬申戸籍」によって、租税・兵役・教育の義務を負わせてきた。

また、同年八月二十八日、政府は太政官布告をもって、「賤称廃止令」、いわゆる「解放令」を出すことになった。それは、次のようなものである。

―穢多非人等ノ称被レ廢候条、自今身分職業共平民同等タルヘキ事。

これによると、法的・制度的に部落差別はなくなることになり、建前では身分・職業ともに平民と同等であることになった。長年にわたる悲惨な歴史は終止符をうったかのようにみえた。しかし、部落民には「新平民」という新たな差別的な呼称が付けられたにすぎなかった。事実、前述した「壬申戸籍」には「新平民」、「旧エタ」などと記録されている例も少なくない。いわば、国の制度として、戸籍上に差別を残していたのである。つまり、「身分・職業の自由」の名のもとで、部落民を資本主義社会の自由競争の厳しいスタートラインに立たせたことになり、結果的に部落民の困窮をより深刻化させた。

さらに、「解放令」の布告が農民から強い反撥を引き起こした。その直接的な導因は、台頭してきた部落民の経済活動に対する一般民側の反感であった。具体的に言えば、「解放令」によって、平民として生きようとした部落民の振る舞いが一般民からの反感をかっした。しかし、その本質的な起因は、「解放令」によって、差別を前提とした村落社会における豪農による支配秩序の解体に対する一般民側（とくに農村の有力者）の危機感があったからである。もともと、「解放反対一揆」の主導層が村の豪農層であった。こうした豪農に「扇動」されて、一般農民が加わったことよって広範囲に広がった。一般農民が参加した理由には、豪農との間に家父長的な村落支配関係があったとともに、明治政府の取られていた近代的な政策への不安及び生活の困窮への不満があつたと推測できる。しかし、最も大きな理由は、農民たちが、「解放令」によって、自分たちが部落民と同等の地位に下ろされたことを憤怒したからである。

「解放令」の年から三年間にわたり、いままの兵庫・高知・岡山・福岡などの各地で「解放令反対」をかかげた万単位 of 農民による一揆が起こっていた。この一揆は「えた征伐」、「えた狩り」などと叫ばれ、部落を襲い、人家を焼き払ったうえに、無抵抗の人びとまでも殺傷していたのである。

このように、明治という新しい時代に入っても、差別の現実には旧態依然であった。「解放令」によって、部落民の身分を表す呼称が廃止され、長い間に固定されてきた「身分制度」に依拠する（境界）が不明瞭になった。これまで被差別部落民の存在によって、保たれた心理的なバランスが崩れた一般民の部落民に対する反撥が高まり、両者間の対立を激化した結果、差別をより悪化させたとと言える。

## 二 蓮太郎の男らしさ

前述してきたような時代に生きる丑松の父は、息子を理不尽な差別から守るために、丑松に素性を「隠せ」と固く戒めたのも部落民にとって当然のことである。しかし、一般的には、素性を隠すことは自己否定であり、自我確立への道を閉ざすことにはかならない。父の戒めは、部落民の生きる保身術である。また、立身出世の秘訣でもあったが、社会活動家の猪子蓮太郎の感化を受け、自我に目覚めた丑松にとっては、自分を束縛する足枷でもあった。丑松はその両者の狭間に陥る苦悩から抜け出せずにいたのである。

父と対照的な影響を丑松に与えたのは蓮太郎であるが、蓮太郎は、応援していた市村弁護士への敵対勢力の暴行によって非業の死を遂げる。その蓮太郎から、丑松は勇気を与えられ、父の戒めを破り、自分の素性を社会に告白し、

新天地へと旅立っていくわけである。

しかし、告白を果たした丑松は飯山には留まらない。それはなぜなのか。また、丑松は蓮太郎から何を学んだのか、蓮太郎の生き様に見せた「男らしさ」とは何なのか、丑松の土下座の告白に注目して、これらの問題を考察していきたい。

社会から放逐されるなら、死を選ぶとまで考えた丑松は、社会の矛盾に不満を感じていながらも、それを正そうとせず、その不満をひたすら内面に鬱積させていくのであった。千曲川の辺を彷徨う丑松の姿からそれが読み取れる。そのような丑松に一筋の光を帯びた出口を示したのは蓮太郎の壮絶な死であった。

そこで、丑松は蓮太郎の死から何を学んだのかについて考えてみたい。まず、テキストで確認する。（傍線は筆者が付したものである。波線は、別の論点を展開するためのものである。）

### 【本文①】

涙は反って枯れ萎れた丑松の胸を湿した。電報を打って帰る道すがら、丑松は蓮太郎の精神を思いやっ  
て、其を自分の身に引比べて見た。さすがに先輩の生涯は男らしい生涯であった。新平民らしい生涯であった。

有のままに素性を公言して歩いて、それで人にも用いられ、万許されていた。「我は穢多を恥とせず」

——何というまあ壮んな思想だろう。其に比べると自分の今の生涯は——その時に成つて、初めて丑松も気がついたのである。自分は、それを隠蔽そう隠蔽そうとして、持つて生れた自然の性質を銷磨していったのだ。その為に一時も自分を忘れることが出来なかつたのだ。思えば今までの生涯は虚偽の生涯であつた。自分で自分を欺いていた。ああ——何を思い、何を煩う。「我は穢多なり」と男らしく社会に告白するが好いではないか。と、「こう蓮太郎の死が丑松に教えたのである。」(第二十章の四)

(中略)

「死んだ先輩に手を引かれて、新しい世界の方へ連れて行かれるような心地がして、」急に丑松は新しい勇気を掴んだ。どうせ最早今までの自分は死んだものだ。恋も捨てた、名も捨てた。——ああ、多くの青年が寢食を忘れる程にあこがれている現世の歡樂、それも穢多の身には何の用が有ろう。「新平民——先輩がそれだ——自分もまたそれで沢山だ。」

(中略)

「いよいよ明日は、学校へ行って告白けよう」(同前)このように、丑松は、蓮太郎の生き様から「男らしさ」を感じとつたのである。ここで二回も繰り返された(「男らしさ」とは、差別されてもいいんだ、差別されようが、蔑

視されようが、それは差別する側の勝手だ。悪いのは差別する側だから、こちらは堂々と生きていけばいいのだ、理不尽な現実を引き受けてやるという気概を持つことが蓮太郎の(「男らしさ」)であり、ここで言う(「男らしさ」)の内実だと言える。その裏付けは社会活動家としての蓮太郎のもつ、人間平等という近代的な思想にはかならない。

さらに、丑松が自分の苦悩の原因は、「隠せ」という自己否定にあり、自分の素性に向き合おうとしない現実拒否にあると気づいたのである。現実に対して、不満ではあるが、どうもがいても部落民の血筋を変えられないならば、その現実を受け入れるほかはないと悟つた。尊敬する先輩が「新平民」を潔く受け入れたように、「自分もそれで沢山だ」と思うようになった。それは、社会的な劣位にいるという現実を受容するという考えをもつようになつたことを意味する。

### 三 差別の本質と丑松の錯覚

丑松の土下座の告白は、『破戒』のクライマックスと言える。また、研究史上で度々問題視されてきた箇所でもあるが、今までの研究では、丑松の告白に絡む問題の解き明かしはまだ不十分であると感じられる。

素性を隠してきた人生は、「持つて生れた自然の性質を銷磨していた」「虚偽の生涯であつた」、つまり、隠蔽は虚

偽であり、告白することは真実だと悟った丑松ではあるが、先に引用した本文の波線部分から分かるように、丑松は、自分も蓮太郎のように「素性」を明かせば、「それで人にも用いられ、万許され」る、という錯覚を抱いていた。丑松のこの考え方の起因を考えれば、父は自分の人生を犠牲にしてまで、丑松を庇護したことが、結果的に、彼を部落民から遠ざけたことになり、部落民社会の現実を目を向けようとせず、同族と一線を画する意識を丑松に醸成させたのである。それが本文の次の描写から確認できる。

#### 【本文②】

斯うして無智と零落とを知らずに居る穢多町の空気を呼吸するといふことは、可傷しいとも、恥かしいとも、腹立たしいとも、名のつけやうの無い思をさせぬ。『吾儕を誰だと思ふ。』と丑松は心に憐んで、一時も早く是処を通過して了ひたいと考へた。(第八章の四)

一方、校長たちは、蓮太郎が素性を明かしたから、万事許されたかのようにうそぶいているが、実際、蓮太郎には差別視される「新平民」という「印」が付けられていることには変わりはない。それは、文平と丑松の激論や銀之助の発言の端々から多く確認できる。仮に、丑松が部落民であることを打ち明けたとしても、果たして校長達は丑松が小学校に留まることを容認してくれたであろうか。答えは

否ということが一目瞭然である。もちろん、部落民に対する差別は、隠したか隠されたかという生易しい問題ではない。しかし、奇しくも、丑松のこのような考え方は、自分を排除しようとする校長たちの言論と一致するものが見られる。

第二十一章には、丑松の素性が知られた後、丑松を排除する機会を狙らう校長と郡視学は、「瀬川君のこともいよ／＼物に成りさう」だ、チャンスが巡ってきたと見て、学校から丑松を追い出すことに乗り出した。そのため、地元の有力者と結託して話し合う場面が書かれている。(下線は筆者が付したものである。)

#### 【本文③】

ナニ、それも、猪子先生のように飛抜けて了えば、また人が許しもするんですよ」

と白髭の議員は引取って、「その証拠には、宿屋でも平気で泊めますし、寺院でも本堂を貸しますし、演説を為るといえば人が聴きにも出掛けます。あの先生の可厭に隠蔽さんから可。最初からもう名乗ってかかるといふ遣方ですから、そうなるとう人情は妙なもので、むしろ気の毒だという心地に成る。ところが、瀬川先生や高柳君の細君のように、それを隠蔽そう隠蔽そうとすると、余計に世間の方では厳しく言出して来るんですよ」

「大きに」と郡視学は同意を表した。(第二十一章の五)

この話し合いの結果は丑松が校長にとつて、嫌悪する存在であった。部落民であることを格好の材料に丑松を追い出そうとする彼らの魂胆は明らかである。いわば、丑松が部落民だから教員の座を追われたのである。しかし、校長たちは、本音を隠して休職させた理由を丑松が素性を隠したからだとし、自分たちのポイコットを正当化して、差別的な行為の本質を巧妙にすり替えた。

確かに、部落民であることを自分から名乗ってくれば、差別する側には好都合であろう。「気の毒だ」という優越感に浸った彼らは、部落民に「温情」を見せることもあつたかもしれない。しかし、彼らの温情は残酷な差別の現実に向つての意味があるか。「破戒」の第一章に描かれている大尽・大日向の放逐される悲劇を想起されたい。被差別部落民であることで、病院からも下宿先からも、罵声を浴びせられて、容赦なく追い出されたのである。そこには温情の欠片も見られなかった。また、故郷を追われ、職場を転々とした末に、暴力に命が奪われた蓮太郎の受けた迫害も悲惨なものであつた。それを忘れなければ、校長らの所謂、隠しさえしなければ万事許される云々は単なる虚言だと分かるはずである。

以上見てきたように、隠さなければ「万許され」とい

う丑松の考え方は、蓮太郎の思想に対する理解の不十分さと差別の本質の認識の未熟さを浮き彫りにしている。それは丑松の現実を見誤つた錯覚であると言わざるを得ない。なぜなら、それによれば、部落民が差別を受け、排除される原因は、部落民の出自ではなく、単に彼らの「いやに隠した」からだと言ひ訳が正当化されるからである。言い換えれば、悪いのは差別する側ではなく、差別される側であるということになり、明らかに誤つた理屈である。

視点が違つて、前述した校長と郡視学らとの会話の場面は、小諸義塾での教職経験をもつ藤村ならではの観察力によつて、校長らの陰險な性質を赤裸々に暴き、教育界の保守的な旧世代の人物像を巧みに描き出した。彼らに向ける作者の批判的な眼差しは鋭いものであるが、厳然たる身分制度に由来する差別の本質からは逸脱している。それは、作者の部落問題に対する理解と認識に基づくものであり、当時の一般的な見識の限界を反映していると思われる。

#### 四 社会的威力に屈した土下座

素性の露頭を恐れ、敬慕する先輩・蓮太郎への告白を果たせなかつたことへの悔恨、周囲の人々を欺瞞したことに対する良心の呵責、また、高柳を代表する社会の威力に対する恐怖、これらが丑松に幾重の精神的な苦痛をもたらした。この苦境から抜け出そうとした丑松の起こした行動

は、生徒たちの前で自分の素性を告白し、隠してきたことを土下座して詫びることであった。それを本文で確認する。

【本文④】

「皆さんが御家へ御帰りに成りましたら、何卒父親さんや母親さんに私のことを話して下さい——今まで隠蔽していたのは全く濟まなかつた、と言って、皆さんの前に手を突いて、こうして告白けたことを話して下さい——全く、私は穢多です、調理です、不浄な人間です」

丑松はまだ詫び足りないと思つたか、二歩三歩退却して、「許して下さい」を言いながら板敷の上へ跪いた。(第二十一章の六)

この土下座について、丑松を「卑屈な男」と見る批判的な論調が多い。たとえば、北原泰作は、「主人公の丑松は自分の素性を告白するとき『我は穢多です、不浄な人間です』と言ひ、板敷の埃の中に額を埋めるほど跪いて許しを乞ふ卑屈な男である。」と厳しく批判している。それに対して、共感できるものとして、平岡敏夫の次の指摘を引用したい。

「額を塵埃の中に埋めるのと、ただ頭を垂れて両手を堅く組み合わせるのとは非常な違いである。(中略)丑松をして塵埃の中に埋めさせたもの、かれの頭をおさえて床にすりつけたものは何か。それこそ『部落民』という社会的

偏見であつたはずだ。その重圧が強ければ強いほど告白は困難かつ痛切なものとなり、逆に、丑松が頭をあげればあげるほど告白も軽くなる。すなわち、偏見の重圧が軽くなることを意味する。」このように、平岡氏は社会の偏見と告白とのダイナミックな関係を説明している。

また、土方鉄は、明治時代には「穢多」出身の人が教師であることは許されないことであり、その素性を隠して、教師になることが露見したら、リンチされるといふ当時の差別の厳しさを考えれば、丑松の土下座は当然のことだといふ指摘もある。

さらに、高野辰之は、飯山地方の穢多を忌むことの甚だしきについて、部落民とは「決して同席もしないし、言葉も交へない」と証言している。

結論として、当時の社会では差別する側と差別される側の両者には超えがたい厳然とした溝があつた。生きるためとは言え、部落民が一般人になりすまし、人々と接することは社会通念からすれば許されないことであつた。まして、丑松のように教師として教壇に上がることは大罪と看做されていたといふ差別の真相を、丑松の卑屈なまでの土下座という姿を通して浮き彫りにされた。ひと言で言えば、当時の部落民に対する苛酷な差別があつたといふ社会の厳しい現実が明確に見えてきたのである。

## 五 丑松の告白の本質

「蓮華寺では下宿を兼ねた。」という名文で始まる『破戒』の冒頭部分に描かれた風景は、急な転居に追い込まれた（心理的なものもあったが）、丑松の心情を表すものだと理解できる。同じ部落民出身の大尽が排斥される惨劇を目の当たりにして、部落民に向ける世間の人々の差別の激しさ、つまり現実の厳しさを思い知らされて、「危ないとも恐ろしいとも思わずに通り越してきた」自分に気付いた丑松は、隠してきた自分の素性の露頭を恐れ出したのである。そのような丑松には、飯山は「——すべて旧めかしい町の光景が香の烟の中に包まれて見え」、閉塞的な社会による庄迫感と恐怖感が、丑松の気持ちを陰鬱させたのであろう。

しかし、その冒頭の光景と対照的に、『破戒』の終章に近づくとき、丑松の目に映る光景が一変した。

### 【本文⑤】

冬の朝日が射して来た。丑松は机を離れて窓の方へ行つた。障子を開けて眺めると、例の銀杏の枯々な梢を経て、雪に包まれた町々の光景が見渡される。板葺の屋根、軒廂、すべて目に入るかぎりのものは白く埋れて了つて、家と家との間からは青々とした朝餐の煙が静かに立登つた。小学校の建築物も、今、日をう

けた。名残惜しいやうな氣に成つて、冷く心地の好い朝の空気を呼吸し乍ら、や、しばらく眺め入つて居たが、不図胸に浮んだは蓮太郎の『懺悔録』、開巻第一章、『我は穢多なり』と書起してあつたのを今更のやうに新しく感じて、丁度この町の人々に告白するやうに、其文句を窓のところで繰返した。（第二十一章の一）

このように、『破戒』の冒頭に描かれた光景とは全く別世界のような印象を受ける。丑松の目には明るい、穏やかな心地の好い朝の風景として映つていて、不安と憂いなどの暗さは払拭された。

それ以外に、告白を決心した丑松の心情に見られる大きな変化が朝の食事の場面にも現れている。これを本文で確認することができる。

### 【本文⑥】

丑松の部屋へも袈裟治が膳を運んで来た。斯うして寺の人と同じやうに早く食ふといふことは、近頃無いためし——朝は必ず生温い飯に、煮詰つた汁と極つて居たのが、其日にかぎつては、飯も焚きたての氣の立つやつで、汁は又、煮立つたばかりの赤味噌のほひが甘さうに鼻の端へ来るのであつた。小皿には好物の納豆も附いた。其時丑松は膳に向ひ乍ら、兎も角も斯うして生きながらへて来た今日迄を不思議に難有く考へた。あ、卑賤しい穢多の子の身であると覚期すれ



ば、飯を食ふにも我知らず涙が零れたのである。(第  
二十一章の一)

もし父が斯の世に生きながらへて居たら、まあ気でも  
狂つたかのやうに自分の思想の変つたことを憤り悲む  
であらうか、と想像して見た。仮令誰が何と言はう  
と、今はその戒を破り棄てる気で居る。(同前)

作品には朝の食事の場面について何回か描かれている。  
それまで素性の露頭を恐れ、悩んでいた丑松は食欲が湧か  
ない時が多かった。ここでは初めて、食事を取ることに  
よつて、活力を取り戻し、一歩前進する丑松が描かれてい  
る。自己憐憫の気持ちと現実の自分を受け入れる「覚期」  
(覚悟)が入り交じつて、丑松は告白の決意を固めていった。

作品の結末は、丑松の新生の方向付けの担保として、丑  
松が大日向の計画した移民事業の有望な一員として迎えら  
れ、新天地へ向かうという明るい結末をもつて作品が閉じ  
られた。問題は、丑松の告白は現実と結びつかないこと  
である。つまり、前述した部落民への厳しい差別の実態を見  
て分かるように、飯山には素性が知られた丑松の居場所が  
なくなっていた。もし、飯山に残れば、丑松も大日向や蓮  
太郎のように差別されるに違いない。そして、告白したこ  
との影響は丑松に留まるはずもない。素性を隠して生きて  
きた叔父一家に災難を招く可能性も容易に推測できる。し  
かし、それについて作品では直接に触れていない。告白に

よる現実への影響が遮断されたように、丑松の心理的な負  
担の減輕のみに注目した告白の効果を描写されている。言  
わば、現実はどうであろうが、丑松にとつて、精神的な解  
放の獲得が告白の最大の目的であり、生き抜くための救済  
策である。また、告白は社会から追放され、つまり、社会  
的死を意味する。これが丑松の告白の本質と言える。

それは、『若菜集』に見られる告白による救済という作  
者の成功実績に基づいて、藤村を丑松の告白の効果、つま  
り告白による丑松の再生を確信させたのではないかと考え  
られる。それについて、多くの論者は丑松を現実からの逃  
避だと否定的な見かたを示している。また、それを作者藤  
村への批判まで発展して論じられることも多々ある。

そのような多くの論説のなかに、三好行雄は、「ためら  
はずして言ふ」藤村の告白は「芸術的創造の営為に置換さ  
れることで、創作活動にふくまれる現実的行為性を媒介と  
して、現実へはたらきかける通路を所有できた。作家は書  
くという行為で状況を動かすことができる。しかし、丑松  
の告白にはその可能性がない。告白による救済は心理の圏  
内にきびしく限定され、現実へかかわるいかなる通路もも  
たない。」と告白の丑松と作者藤村に対する意義を峻別し  
たうえで、丑松の告白には「現実における生の再建の可能  
性をふくまれない」と明言し、その効果を否定している。

しかし、前述した引用本文の⑤と⑥を一読すれば、告白

によって、丑松の精神的な負担が軽減されたことが明白である。告白した丑松の能動的な行動が具体的に描かれてはいないが、少なくとも、告白によって、素性の隠蔽という足枷を解き放したことは、つぎのステップを踏み出すに不可欠なことであると言えよう。

また、丑松は、蓮太郎の思想の感化を受けるが、蓮太郎のような社会活動家にはたり得ない。それは、『破戒』には差別社会の改革というベクトルを持たないことを示している。言わば、藤村は、部落民という題材を見出し、部落民の出自に苦悶する丑松に仮託し、「ああ、自分のようなものでも、どうかして生きたい」という生への強い希求を表現したと理解できる。

確かに、丑松は、社会（よのなか）の矛盾に不満を感じ、差別社会の問題を提起しても、それを向き合って、解決しようとしめない。それは『破戒』の限界と言わざるをえないが、「恋も捨てた、名も捨てた。多くの青年が寢食を忘れる程にあこがれている現世の欲楽、それも穢多の身には何の用が有ろう。」という丑松の嘆きから、抵抗の無意味さを悟った丑松の絶望と諦観が確認できるように、卑屈な土下座をしてまで、差別の重圧に耐えながら生きていかなければならない部落民青年の姿が活写されている。卑屈な逃避にせよ、単なる精神的な解放にせよ、当時の社会では、部落民にとって、尊厳をもって人間らしく生きる道は

ないという厳しい現実を反映したこと自体に意義があるのではないか。時代の制限を考慮しながらも、被差別部落の実態と真相を描きだした『破戒』が果たした問題提起の意義が大きいと評価できる。

おわりに

最後に、藤村の思想について触れておきたい。藤村はルソーが自分の自我形成に重要な役割を果たしたと明言している<sup>⑧</sup>。ルソーの『告白』（コンフェシオン）を読んで、「直接に自然を観ることを教へられ」、「真に束縛を離れてこの『生』を覗ようとするとその精神」に感嘆したという。これについては、下山教授が指摘された通り、「これは、即ち（ありのまま）の肯定、自分の欠点や恥としか思えぬ要素や、決して上とは言えぬ社会的地位付け」などは、「全て所与のものであって自分の責任の将外のことだ」という認識を獲得した<sup>⑨</sup>。藤村の体験である。

「思へば、言ふぞよき。ためらはずして言ぞよき。いさ、かなる活動に励まされてわれも身と心とを救ひしなり。」

これは『藤村詩集』の序に書かれている一節である。周知のとおり、ここでの「いさ、かなる活動」とは『若菜集』の発表を指している。藤村は『若菜集』の刊行によって、詩人の地位を確立し、成功への道を拓いた。つまり、

ルソーに励まされて、ありのままの自己を受け入れ、生の肯定という信念が確立するに至ったのである。そして、藤村はその成功体験を原点に、「言ふべし、言ふべし、それが自分の進む道路では有るまいか。斯う若々しい生命が丑松を励ますのであった。」(第九章の四) このように、丑松の告白を構想したのであろう。

藤村は、『緑葉集』に収める諸篇の習作からスタートし、その延長線上にある『破戒』を経て、さらにその後の自伝的小説である『春』や『家』などの作品まで、自己に内在する真実、すなわち(ありのまま)の姿でいることに執着してきた軌跡が見られる。丑松の告白による精神的な解放の獲得に至るまで、藤村のこの思想が投影されていると思われ、これこそが丑松の告白の本質であると考えられる。

注

- ① 「旧主人」は、発売禁止処分をうけたため、『緑葉集』に収録されなかった。
- ② 『部落問題論』和田鶴藏著 学術図書出版社2004・4 (113～114ページ)
- ③ 『破戒』第一章の四
- ④ 『「破戒」と部落解放運動』(日本文学研究資料刊行会『日本文学研究資料叢書(鳥崎藤村)』有精堂、1971・2

⑤ 平岡敏夫『「破戒」の私論』大東文化大学『東洋研究』第二三三号 1970・6 (昭和四十五年)

⑥ 飛鳥井雅道と土方鉄との対談「日本近代文学における被差別部落・『破戒』の評価をめぐって」が『歴史公論』昭和53年1月号特集・「近代の被差別部落」雄山閣出版。

⑦ 『「破戒」後日譚』(趣味) 明治四十二年四月 筆名：唾峯生)

⑧ 『破戒』の第十三章の一、第十六章の一などを参照

⑨ 野間宏は、「丑松は自分の教える生徒たちの前に土下座して自分の出身を告白し、その後、新天地を求めてテキサスに渡るといふのだ。藤村が部落民の問題を人間の問題として、充分考えつくことができなかつたことをあらわにしているのである」と指摘している。

⑩ 『「破戒」に(つづ)』(『破戒』、岩波文庫、1957・1解説『「破戒」論への試み』(鳥崎藤村論) 昭和41・4、至文堂刊行収)

⑪ 「ルウソオの『懺悔』中に見出したる自己」『秀才文壇』1909・3 (明治四十二年)。後「新片町」に収録。

⑫ 『日本の作家100人 鳥崎藤村—人と文学』下山 嬢子 勉誠出版(株) 2004・10・15